

慣れ親しんだ場所で穏やかに人生の最期を迎える……。多くの人が望む形の終末期を実現させるため、みどりの場で患者のケアを担う医師や介護スタッフ、ヘルパーなどを育てる動きが広がっている。自宅でのみどりを望む人は多い一方で、在宅医の不足などでその受け皿の整備は遅れており、患者の苦しみを理解し、寄り添う人材の育成は急務だ。

# 在宅ケア担い手育て

## 「穏やかな最期を」足りぬ受け皿

2018年12月、一般社団法人エンドオブライフ・ケア協会(東京・港)が横浜市内のみどりの援助者を養成するための「援助者養成基礎講座」を開いた。「解決が困難な苦しみを抱えた人がいても、穏やかな最期を実現できる」。同協会の代表理事、小沢竹俊医師は身ぶり手ぶりで参加者に訴えかけた。

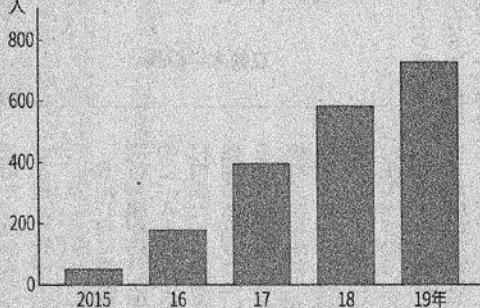
講座には全国から51人が出席。参加者は看護師が約半数と最も多く、そのほか医師や介護職、ソーシャルワーカーなど多岐にわたった。同協会は15年春、在宅の緩和ケアに長年従事し、クリニック院長も務める小沢医師を中心に設立。終末期患者や家族を支援し、みどりができる人材の育成が目的だ。同年7月に講座を開始し、月2、3回程度、東京や大阪、名古屋などで定期的に開催する。各回には在宅だけでなく病

棟などで勤務する医療者を含めて数十人が参加。座学やグループワーク、具体的な事例を想定したロールプレーを通じて「苦しみを抱える患者にどのように接し、支えるか」を学ぶ。コソの「一つが相手の言った言葉に「気持ちよ分る」など理解したつもりになるのではなく、そのまま反復することだ。相手の言いたいことをしっかりと聞く意思を示し、

その人の苦しみと支え方を知る一歩になる。これまでに約4500人が受講。受講1年以内に経験した事例をレポートで提出し、協会認定の「エンドオブライフ・ケア援助士」を取得できる。19年4月末までに約730人が認定された。同協会では、5人に1人が75歳以上となる25年までに認定者を5千人程度に増やすのが目標。小沢医師は「みどりのなど解決ができない苦しみを抱える人と関わるのが苦手な医療者は多い。対応できる人材の質を高め、同時に量も増やしていく必要がある」と強調する。

実際に受講者の多くが培ったスキルを生かしている。「当たり前だと思っていた考えがらっと変わった」。訪問介護事業所に勤める介護福祉士の津野采子さん(47)は16年、大阪で開催された

エンドオブライフ・ケア援助士の認定者数



(注)19年は4月末までの人数  
(出所)エンドオブライフ・ケア協会

### 援助者養成基礎講座のポイント

- ・高齢化など時代背景の学習
- ・病気などで「苦しみ」を抱えた患者とのかかわり方のスキル取得
- ・実際に患者との対話を想定したグループワーク
- ・受講者のフォローアップ研修による継続的な学習体制
- ・実践を踏まえた課題文書などを提出し、協会認定資格の取得

## どう寄り添う 講座で議論



講座では座学や、受講者同士で様々な状況を想定したロールプレーにも取り組む(18年10月、大阪市)

## 体制整備にも遅れ

高齢化が急速に進むなか、現場の人手不足などで在宅医療の体制整備は遅れている。在宅医療の中核を担う在宅療養支援診療所や在宅療養支援診療所などがなく、自治体は2015年度末時点で全国の4分の1にあたる約450市町村。地方部では採算が取りにくく、北海道や東北に多い。内閣府の12年度の調査

によると、「最期を迎えたい場所」として「自宅」を選んだ人が約5割を占めた。高齢化が進めば医療機関のベッド数が不足するため、受け皿として国は診療報酬を厚くするなどして在宅医療の環境整備を後押ししている。だが在宅で終末期に

対応する医療機関数は全体の5%程度のみだ。体制整備とともに、現場と強調している。

講座に参加した。津野さんには苦い経験があった。受講数年前、同世代の末期がんの女性を担当。持ち前の明るさでどんな患者とも接することができると思っていたが、その女性にある日、「あなたはいよいよね」と言われてしまい、返答に窮した。「そんな大丈夫なはずがない」として大丈夫なはずがない人にとって大丈夫なはずがない

講座では座学や、受講者同士で様々な状況を想定したロールプレーにも取り組む(18年10月、大阪市)

津野さんは「ヘルパーは者と接する時間が医師や看護師などと比べて多く、在宅療やみどりにおける役割は大きい。意識の底上げに取り組みたい」と強調する。小沢さんも一講座で学んだ人にさかんに話している。石原潤

迷いを小沢医師に打ち明けると、「私は医師ですが、(病気を)治せなくても患者のもとに行くのですよ」と返答され、はっとした。講座で伝えられているケアの本質は「無力でもよい」「何もできない自分を認め入れる」。その意味が初めて分かった気がした。津野さんが勤める事業所では50人ほどの従業員で100人以上の患者を担当する。多くは高齢者で、末期がんなどでみどりをやる機会も少なくない。津野さんは「あなた

の苦しみを聞きたい。だから教えてほしい」というスタンスで患者と向き合っている。